道元 坐禅ひとすじの沙門

今枝愛眞

NHKブックス

255

今枝愛眞（いまえだ・あいしん）
1923年　静岡県に生まれる
1947年　東京大学文学部国史学科卒業
現　　在　東京大学教授，文学博士
専　　攻　日本中世史，禅宗史
主な著書　『中世禅宗史の研究』
『禅宗の歴史』
『道元―その行動と思想』
『道元とその弟子』
『日本仏教史』中世（共著）ほか

NHKブックス　255　　検印廃止

道元　坐禅ひとすじの沙門

昭和51年6月20日　第1刷発行
昭和52年5月1日　第4刷発行

著者　今枝愛眞
発行者　浅沼博

印刷　三和印刷
製本　明泉堂
装幀　栃折久美子

発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町41―1
郵便番号150　振替東京1―49701

落丁本・乱丁本はお取替いたします

道　元

坐禅ひとすじの沙門

今枝愛眞

NHKブックス

255

© 1976 Aishin Imaeda

はしがき

道元が新たに見直されようとしている。近年、道元に関する出版物が非常に多いことが、それを何よりも端的に物語っている。すでに大作・名著が多い中で、なおかつ私が筆を起こしたのは、まだ少なからず疑問や問題点が残っているように思われたからである。

道元の偉大さについては、言うまでもないが、歴史的人物というものは、その人物が生きた時代から遠ざかるにつれ、加速度的に神格化へと向ってしまうものである。そして年月というものが、多くの誤りや食い違いなどに、とてつもない重みを与えてしまうことがある。そこで、一人でも多くの方に道元の真実について、理解を深めていただきたいというのが、本書の願いなのである。

道元（一二〇〇―五三）が生をうけたのは、今から七百五十余年もまえのことである。源平二氏の激突が繰り返され、ようやく源頼朝の独裁政権が、鎌倉に樹立されたばかりであった。人びとは長期にわたる戦乱の後、生きるための指針を失い、新しい救いを切実に求めていた。親鸞は念仏門に入ったばかりであり、日蓮や一遍もまだ生まれておらず、思想界も宗教界も、まったく混迷から抜け出ることができなかった。道元が生まれ育ったのは、そのような時代であった。人間がとかく尊厳を失いかけている今日の時代とよく似通っていた。

このような時代に、人はいかに生きるべきか、人間の真理とは何かを、徹底的に探究してやまな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かった道元、伝統的な考え方に捉われず、比類ない強靱な精神力によって、混迷の時代を純粋に生き抜いた道元、独自の境地を開き人間の尊厳性を確立し、人びとに救いの道を説いた道元、その生き方とその思想には、心惹かれるものがある。しかもその格調高い文章は、読むものに新たな自信と励ましを与えてくれる。それは道元の思想が鎌倉時代の産物であるにも拘らず、時代を超えた永遠の真実であるからにほかならない。

このような日本思想史上の巨峰であり、偉大な宗教家でもある道元については、すでに多くの研究があり、和辻哲郎の「沙門道元」をはじめ、その人間像が多く書かれてきた。主著『正法眼蔵』などに関する研究も多い。

しかし、ここでは単にそのような道元の伝記を明らかにしようというのではない。本書の主眼は、『正法眼蔵』のなかの道元を明らかにしたいという点にある。と同時に、各宗派のあり方を背景にしながら、道元の思索と人間像を、時代の流れの中に浮彫りにしたいと考えたのである。

そこで、まずⅠ「仏法との出会い」では、権門に生まれた道元が、なぜ出家して天台僧となったか、天台宗から禅宗に変った理由は何かなど、道元という一個の創造的人間が、生来の悲劇性とどのように対決しながら自己に目覚めていったかを見た。ついで、Ⅱ「悟りへの道」では、二十四歳で中国に渡った若き道元が、最初は大陸禅の世界に戸惑いながらも、幾多の苦難をのりこえて、釈尊の悟りの境地を学びとったいきさつを、その思索と体験の跡を通してながめた。Ⅲ「新しい禅の序曲」では、二十八歳で帰国した道元が、坐禅こそ安楽の法門であるから、人びとにひろく勧めるのだと説いたが、なぜ道元は坐禅だけを選んだか。その禅は一体これまでの日本の仏教とどのよう

に違うかなどの点について考えた。

そしてⅣ「禅思想の展開」では、はじめて深草に禅の道場を開いた道元が、どのような禅思想を展開したか、その内容と特質について考え、さらに道元のいう「仏法のための仏法修行」の理想とはどのようなものか、他宗からの多くの入門者たちをどのように教育しようとしたかなどについて述べた。さらにⅤ「正法禅の確立」では、四十四歳のとき越前の山中に入ったのは何故か、京都から深草・越前と、道元の思想はどのように深化したか、そして、道元の究極の理想は果して何であったかなどについて考えた。Ⅵ「道元の思想の流れ」では、道元の没後その思想がどのように受け継がれたかを考え、そのなかで『正法眼蔵随聞記』のしめる位置などを明らかにしたつもりである。

『正法眼蔵』の引用文は日本思想大系本によった。巻末の「道元略年譜」と参考文献は、道元に対する理解を一層深めていただくため、よきよすがともなれば幸いである。

本書の一部は、NHKの「宗教の時間」で放送したものであるが、この本をまとめるにあたり、日本放送出版協会の臼居利泰氏には大変お世話になった。ここに心からお礼を申し上げる。なお図版の掲載を許して下さった各位に、記して深甚の謝意を表する。

昭和五十一年五月一日

今枝愛眞

目次

はしがき

Ⅰ 仏法との出会い……11

天下の乱れ 11　鎌倉仏教の誕生 15
道元の出生 20　出家の道 25
なぜ人は修行するのか 28　禅との出会い 32

Ⅱ 悟りへの道……37

修行とは何か 37　いずれの時をか待たん 42
嗣書を求めて 49　如浄との対面 56
悟りの体験 61

Ⅲ 新しい禅の序曲……69

坐禅は安楽の法門 69　『正法眼蔵』の序章 75

修行と悟りは一つ　85　末法思想の否定　90

Ⅳ　禅思想の展開……93

興聖寺の説法　93　修行と悟りの種々相　94
仏法のために仏法を修す　101　男女の平等を説く　103
罪をも許す　109　修行の理想像を描く　113
釈尊と達磨　115　趙州と如浄　121
一日の行持　124　懐奘らの集団入門　129
大恵批判の激化　132　深草の法難　138

Ⅴ　正法禅の確立……141

越前下向の真相　141　山奥の説法　146
出家のすすめ　154　永平寺の建立　159
鎌倉への旅　165　最後の説法　169

Ⅵ 道元の思想の流れ……175
懐奘と『随聞記』 175　道元の復活 184
道元略年譜……189
参考文献……199

道元画像（福井県宝慶寺蔵）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I　仏法との出会い

天下の乱れ

平安時代の末期から鎌倉初期にかけて、日本は政治的にも社会的にも、一つの大きな曲り角に差しかかっていた。その最大の原因は、院政による中央政権が衰退し、地方の治安が極度に悪化したためである。そしてその最も象徴的な事件が、十一世紀後半、奥州安倍・清原一族によって起った前九年の役と、後三年の役であった。この両役を通じ武勲に輝いた源氏が、京都に凱旋するや、公家階級に、かつてなかった大きな脅威と衝撃とを与えたのである。

この中央の公家社会では、摂関家の専横と分裂による勢力争いが長く続き、ようやく摂関家も没落の運命を辿ろうとしていた。その間隙に乗じ、源平二氏が中央政界に進出したのである。そして保元元（一一五六）年、ついに皇室・摂関家・武士の三者が、それぞれ崇徳上皇方と後白河天皇方とにわかれ、互に相争った。保元の乱がそれである。争乱は、源為義・義朝父子など骨肉が血を流し合う、すさまじい権力闘争となった。これまで廃止されていた死刑が復活するなど、末世の様相を人びとにまざまざと見せつけたのである。

ついで、平治元（一一五九）年におきた平治の乱では、平清盛と源義朝とが公家社会の主導権争いと結びつき、その権力を独占しようと、公武入り乱れて鮮血を流した。その結果、源氏が敗れて平氏の勝利に帰した。ここに清盛は位人臣を極め、武家として最初の太政大臣に昇進し、それまでの公家に替って、栄耀栄華を誇る全盛時代が到来したのである。

だが、それも束の間の夢、治承元（一一七七）年、俊寛僧都らの謀議による鹿ヶ谷事件をきっかけに、平氏追討の令旨が、園城寺によった以仁王（後白河天皇の皇子）によって、諸国の源氏に放たれた。

これに呼応するかのように、各地の源氏が一斉に決起したのである。そしていちはやく木曽義仲が平氏を追って入京した。ついで源頼朝による旗上げが伊豆で行なわれ、文治元（一一八五）年三月には、さしもの平家一族も、壇ノ浦の露とはかなくも消えたのである。こうして、頼朝による武家政権がようやく鎌倉に誕生した。

そのころ京都の朝廷では、将軍源頼朝の支持を受けた関白九条兼実が権力を握っていたが、その政敵である久我通親は、自分の養女を後鳥羽天皇の後宮に入れ、やがて生まれた皇子の外祖父という地位を利用して、親幕派の兼実を失脚させ、宮廷内の実権を掌中に収めてしまった。しかも、巧みに頼朝の意向を抑え、孫にあたる皇子を即位させた。これが土御門天皇である。こののち久我通親は、院庁の別当として、絶大の権勢を持つにいたった。

しかし、建仁二（一二〇二）年十月、通親が急死すると、朝廷の主導権は後鳥羽上皇の手に帰し、上皇による院政が再開されたのである。

上皇の院政は、乱脈をきわめたといわれている。頼朝の死後、幕府は内紛や政治力低下のため、その威力はまったく衰えてしまった。おりも折、承久元（一二一九）年正月の雪の夜、鶴岡八幡宮の社頭で、将軍実朝が、兄頼家の遺子で別当を勤める公暁に暗殺された。そして公暁も、北条一族によって謀殺され、源氏の正統は、ここに跡絶えてしまった。

この鶴岡社頭の惨劇は、京・鎌倉双方に大きな衝撃をあたえた。幕府は、将軍の後継者として後鳥羽上皇の皇子を鎌倉に迎えることを申し出た。朝廷の権威回復を志していた後鳥羽上皇は、にべもなくそれを拒絶してしまった。その上、愛妾伊賀局の所領の地頭を解任するようにという要求を、幕府に突き付けた。御家人領の保護は、幕府にとっては死活問題である。そこで幕府も、上皇方の申出を拒否した。そればかりか、皇子の関東下向を強要するため、執権北条義時の弟時房に千騎の兵をつけ、急遽上京させたのである。しかし上皇は、一歩も譲歩しようとはしなかった。幕府は、ついに皇族出身の将軍をあきらめ、頼朝の妹の血を引いている九条頼経を将軍に迎えた。

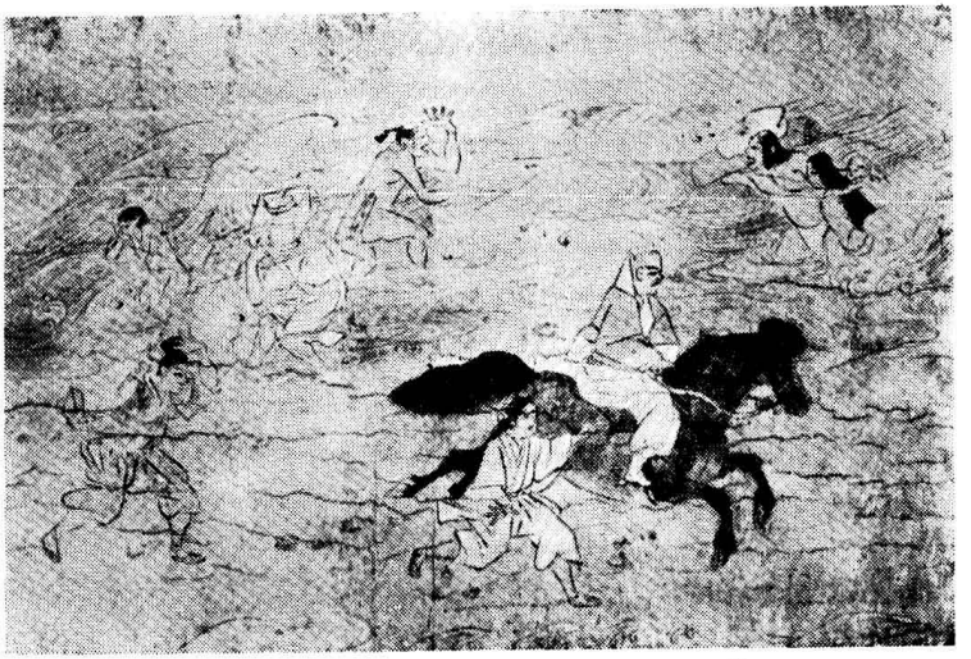
後鳥羽天皇画像　（大阪府水無瀬神宮蔵）

ここにすべては無事に落着するかにみえたが、承久三（一二二一）年五月、たび重なる専横な幕府の態度に憤激した上皇は、鳥羽離宮内にある城南寺の流鏑馬（やぶさめ）と称し、秘に近国の軍兵を召集した。そしてただちに六波羅を総攻撃し、上皇の挙兵に応じなかった京都守護伊賀光季を血祭りにあげ、執権義時追討の院宣を諸国に発したのである。

上皇挙兵との急報に接した幕府の動揺は、非常なものであった。北条政子は幕府の危機を御家人たちに訴え、結束を促した。もはや因循姑息は許されなかった。京都進撃の断が下され、総大将北条泰時・時房指揮のもとに、十九万騎の大軍が京都に向けて出発した。破竹の勢いで、幕軍は各所で上皇方を撃破、はやくも六月十五日には、泰時らが京都に進入したのである。

こうして、承久の乱はあっけない幕切れで終った。だが、乱後の処分は予想以上に厳しく、討幕計画の主役であった後鳥羽・順徳両上皇は、それぞれ隠岐・佐渡へ、土御門上皇も土佐へ配流の身となった。そのほか計画に関った皇族・公家は、一人のこらず処罰を受けたのである。ことに、上皇方に付いた武士に対する処刑は重く、しかも乱後も、泰時・時房はそのまま京都に止まり、ふたたび反乱が起きないように、朝廷や公家の監視、西国御家人たちの統制に当った。これが六波羅探題の始まりである。

一応、承久の乱は治まったが、前九年の役以来、目まぐるしい戦乱興亡に捲き込まれた民衆の動揺と苦難は、まことに量り知れないものがあった。しかも人びとを塗炭の苦しみに陥れたのは、戦乱だけではなかった。それ以上に深刻な打撃を社会にあたえたのは、寛喜の大飢饉をはじめとする史上稀な天災異変の続発であった。寛喜二（一二三〇）年には真夏だというのに、雪が降り霜が下り



洪　　水　歓喜天霊験記（兵庫県武藤家蔵）

た。そのうえ秋から翌年にかけて、異常な天候不順が日本列島全体を襲って、暴風雨が荒れ狂い、洪水が頻発した。全国的な凶作による飢饉が続き、疫病が流行し、惨状は目もあてられぬものがあった。

このような大飢饉と疫病の蔓延に対して、朝廷も幕府も、なすすべを知らなかった。京都の市中では、餓死者が路傍や鴨の河原に累々と重なり、それが日をおって増加し、屍臭が巷に充満したという。人びとは妻子を身売りに出すなど、人身売買が公然とおこなわれた。民衆の苦しみは言語に絶し、それはまさに澆季末世の様相を呈した。それをみて、人びとがこの世を「末法の濁世」と感じたとしても、決して無理からぬことであった。

鎌倉仏教の誕生

このように激しく変化していったのは、政治や社会ばかりではない。宗教界もその例外ではなかった。都の周辺では、南都北嶺の大寺院、とくに比叡山延暦寺と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com